

地球のなかまたち

part Ⅱ

ゴッドマザーの娘



photo by toyosa



「おーい、どうやら生まれたようだぞ」

木に登って様子を伺っていた一族の若者が叫びました。

「男か女か？」

木の下で、ウロウロと落ち着かなげに歩き回っていた長老たちが興奮した声で聞きました。

「そんなこと、ここからじゃわからないよ」と若者が答えます。

「そりゃそうだ。ひとつご挨拶に行ってくるかの」

長老たちは列を作って歩き始めました。

しかし生まれたての赤ちゃんに会えるわけありません。

「まだ早い！」と赤ちゃんの母親に一喝されて、長老たちはすごすごと戻ってきました。



それから一週間後、やっとお許しが出た長老たちは再度出かけました。

赤ちゃんは母親にしっかりと抱かれています。

「マザー、おめでとうございます」

赤ちゃんの母親はこの群れのゴッドマザーでマリリンという名前です。

長老たちの挨拶を鷹揚にうけました。

「ありがとう、これでやっと跡継ぎができた」

マザーは満足そうに答えました。



「と言うことは……」 長老の顔に満面の笑みが浮かびました。

「そう、生まれたのは女の子だ」

マザーの顔も少し緩みました。

「それはそれは、よけいめでたいことです」

長老は赤ちゃんの顔をそっと撫でました。

この群れでは、ゴッドマザーの名前の通り、トップは代々女性と決まっています。

皆、女の子の誕生を心待ちにしていたのです。

「ところでお名前は何と？」

「メリリンだ」 ボスは答えました。

「メリリンですか……。マザーとあまりにも似た名前では？」



「我が家系では、マリリンの後はメリリンと決まっている。ミリリンやムリリンよりはよからう？」

マザーの言葉に長老は返す言葉がありません。

「皆に知らせねば」といって群れへ帰って行きました。

「今のはだれ？」長老達が帰ってしまうと、赤ちゃんはマザーに尋ねました。

「長老といってね、そのうちお前の手助けをしてくれるはずですよ」

「チョウロウ……」

「そのうちわかります。今はしっかりとミルクを飲んで丈夫で大きくなるのが大事ですよ」

赤ちゃんは、幼子特有の青い目で長老達を見送りました。



ゴッドマザーには心配がありました。

今年は赤ちゃん誕生が多く、女の子も3人生まれました。

一番強く、しかも賢くなければゴッドマザーになっても蹴落とされます。

「果たしてこの子にゴッドマザーがつとまるだろうか……」

マザーは我が子の顔をつくづくと眺めました。

「確かに賢そうに見える。が……親の目は当てにならない。確かめる術を考えなければ」



マザーの思いをよそに、メリリンはすくすくと育っていきました。

マザーの体にしっかりとしがみついて、マザーの行くところは何処へでも一緒についていきます。

一月もたつと、メリリンはマザーの背からおりて、単独で行動することも出来るようになりました。

そんなある日のこと、突然が広場で叫び声と泣き声がおこりました。

何事かがおこったようです。

マザーは鋭い目を騒ぎの方へ向けました。



何事が起こったのか確かめようと、マザーは急いで木に登りました。

メリリンはマザーから落ちないように、全身の力で捕まります。

ここで振り落とされては大変です。

どうやら、広場では何人かが騒いでいるようです。

マザーはじっと目を凝らしました。

メリリンも一緒に広場を見つめました。

騒ぎの元は何だ？

揉め事や騒ぎを収めるのもマザーの仕事です。



群れの若い衆も木から広場を眺めています。

どうやら騒ぎの中心は、群れの嫌われ者のガッチーのようです。

「またガッチーが何かをしでかしたらしい」

若い衆の一人が顔をしかめました。

「マザーがガッチーに甘すぎるからだ」

「まったくだ。もう少し厳しくしてもらわないと我々が迷惑する」

こんな声がマザーの耳にも届きました。

何とかしなくてははいけません



広場ではガッチーが啖呵をきっていました。

「オレサマになんか文句があるってのか？」

と、ガッチーは言っているようなのですが、ビスケットをかじりながらなので「オレハマにハンカホンクが……」としか聞こえません。

それでも日ごろの乱暴なガッチーを知っている皆は何も言いません。

遠巻きにしてガッチーを眺めています。

泣いている子供達も何人かいます。



ガッチーが広場で遊んでいた子供達を追い払い、持っていたお菓子を上げてしまった事が騒ぎの始まりでした。

お菓子を取り返そうと、ガッチーに向かっていった子は振り払われて、ベンチに頭をぶつけ、怪我をしてしまいました。

それを見ていたほかの子供達は怯えて丸くなっています。

大人たちは遠巻きにしてガッチーを眺めています。

ガッチーは誰もとめないのをいいことに、広場のベンチをひっくり返したり、棒を振り回したりとやりたい放題です。



そこへもうひとりの暴れ者、ズッチーがやってきました。

どっかりと椅子に座ると、ガッチーに向かって怒鳴りました。

「弱い子供をいじめて、なに威張りくさってるんだ！」

ガッチーは言い返します。

「うるせー。オメーの知ったこっちゃねえよ」

「ケッ。弱いものいじめの卑怯者が！」　ズッチーも負けてはいません。

「なにを！」　ガッチーの顔が赤くなりました。

「かかってくるか？」　ズッチーは身構えました。



ズッチーはあり余る元気と力をもてあましていました。

ガッチーとの喧嘩は望むところです。

これでエネルギーを発散できそうです。

群れの皆に自分の力を誇示して、あわよくばゴッドファーザーになろうと目論んでいました。

ズッチーとガッチーは木の枝に飛び移ると、お互いに睨み合いました。

ガッチーは本当は戦いたくありませんでした。

ズッチーに勝てる見込みはなかったからです。

でもここで弱みをみせると、これからずっとズッチーには頭が上がりません。



事の成り行きにびっくりして、群れの皆が二人の周りに集まりました。

子供達も、おやつを食べるのも忘れて、見守っています。

「マザーを呼んで来い！」 と誰かが叫びました。

「戦わせた方がいいんじゃないか？」 という声も聞こえます。

「いや、どっちが勝っても、勝ったほうは凶に乗る。群れの秩序を乱すことになる」

長老の一声で、若い者がマザーを迎えに走り出しました。



メリリンはマザーと一緒に一部始終を見ていました。

「さて、私は自分の仕事をしなければなりません。お前は何が出来るか自分で考えなさい」

マザーはそう言うと、木の枝を伝って、スルスルと広場へと向かいました。

メリリンは一人残されて、しばらく考えていました。

メリリンに出来ることなど、あまりありません。



それでもメリリンは、マザーの後を追って木の枝を伝い始めました。

メリリンにとっては初めての冒険です。

最初は恐る恐る、でも慣れてくるとマザーと同じようにスルスルと枝を伝っていきます。

何かをしなくては、と思ったわけではありません。

体が自然に動くのです。



広場では怯えた子供達が固まっていました。

恐ろしくて、動くことが出来ないので。

ただただ、ガッチーとズッチーの争いを見るばかりです。

大人たちはというと、二人を遠くから取り巻いて、ワイワイガヤガヤと叫んでいるだけです。

すると、広場の真ん中にマザーが降り立ちました。

さすがに威厳があります。

騒いでいた大人たちもシーンとしました。



その隙を見て、メリリンは子供達に手招きをしました。

「こっちにおいで」

でも、子供達は動こうとしません。

メリリンはもう一度合図を送りました。

「早くこっちへおいで」

子供達のひとりが、そろそろとメリリンのほうへやってきました。

それにつられて、ひとり、またひとりと、メリリンのいる木へ登ってきます。

「急いで！」　メリリンはガッチーやズッチーが気がつかないうちに子供達を遠くへ避難させたいと思いました。

興奮している二人は、子供達に何をするかわからないからです。



マザーは広場に仁王立ちになり、威嚇する声を出しました。

ガッチーはそれを聞いただけで、草の上にヘナヘナと座り込んでしまいました。

ガッチーはマザーがどれほど強いかに染みて知っていたのです。

以前、マザーに歯向かって、酷い目にあったからです。

マザーは優しく見えますが、実際はとても強いのです。

「いつまでも懲りない奴だ」

マザーはガッチーを鋭い目で見下ろしました。

そして、ガッチーの尻尾を掴むと、くるりと結んでしまいました。

「お前がちゃんと改心するまで、尻尾はそのまましておく」

マザーの言葉にガッチーはシュンとしています。尻尾はワオキツネザルにとっては、とても大事なもののなのです。



それを見ていたズッチーは、すばやく木に登ると逃げていきました。

「あ、ズッチーが逃げるぞ」 若い衆の一人が叫びました。

「放っておけ」 とマザーが答えました。

「しかし……」 長老が何かを言おうとすると、マザーが制止しました。

「今回の事件はガッチーが引き起こしたことだ。ズッチーがそれを利用したとしても、罰する理由はない」



広場は静かになりました。

皆、何事も無かったかのように日常の生活に戻りました。

子供達も、いつものように遊んでいます。

メリリンも、マザーに甘えています。

メリリンはゴッドマザーになる素質の片鱗を見せました。

そのことをマザーは嬉しく思いましたが、心配もまた増えました。

ズッチーがトップの座を諦めたわけではないことを、マザーは知っているからです。

メリリンがゴッドマザーになるためには、まだまだ試練を乗り越えなくてはなりませんが、賢いメリリンはきっと素晴らしいゴッドマザーになることでしょう。

おわり